

向大本山大禪師題字

謂
岳
道
人
編
輯
居
士
校
閱

承陽大師
圓明國師
御行狀圖解說

進教會藏版

今見佛聞法由佛
祖面面行持來慈
恩也佛祖若不單
傳奈何至于今日

承陽
累葉

承陽月照輝遐邇
諸嶽花開香萬里
摸索眉毛見如何
眞儀影裏猶憐子

謹題

兩祖圖解說

承陽累葉

鴨溪學人敬草

特18

995



承陽月
真儀影
裏猶憐子

謹題
兩和圖解說

承陽果集

鵬溪學人敬草

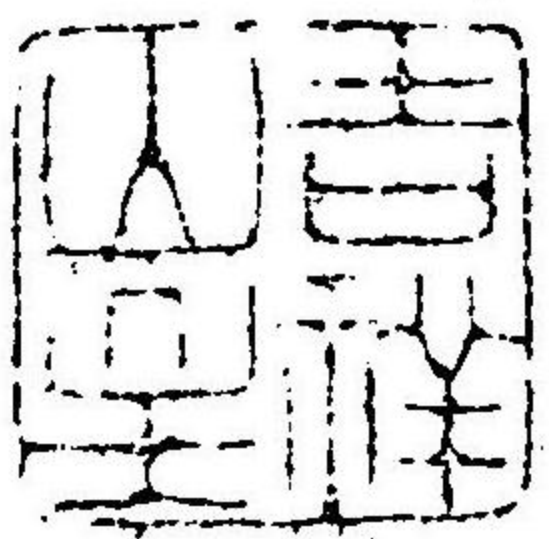
承陽月
真儀影
裏猶憐子

諸獄花開香萬里

摸象眉上見如何

向於愛

永平修由



磨石寶

基

高祖承陽大師御行狀圖解説

高祖承陽大師御行狀圖解説



承陽大師 御行狀圖解説

凡 例

一本書ハ世間幾多ノ曹洞宗信者中未タ兩祖(高祖承陽大師 太祖圓明大師)

ノ妙徳ヲ知ラザル者頗ル多キヲ憂ヒ即チ兩祖ノ御行

狀圖繪ヲ發行シタルニ就キ其圖繪ヲ指示シ其恩徳ヲ

感知セシメンカ爲メニ之ヲ作りタル者ナリ故ニ題シ

テ承陽大師 圓明大師御行狀圖解説ト名ク

一高祖ノ圖解説ハ建撕記永平廣錄傳光錄建撕記圖繪陸

三布教問答曹洞宗史要兩祖傳畧其外一二ノ書籍誌説

等ヨリ抄録シ其疑ハシキ所ハ互ニ比較更正セリ

一本書中第一第二等ノ番號ハ圖中**第一****第二**トアルニ對

照セシメンカ爲メニ之ヲ施セルナリ。

一世間流布ノ圖中漢文或ハ時文ヲ以テ圖毎ニ概畧ヲ記載スル者アルヲ見ル。然レモ漢文或ハ一句二句ノ時文ニ依テ祖德ヲ感セシムルハ甚ダ難シ。又之ヲ讀マシト欲スルカ爲ニ却テ敬禮ヲ失スル場合アリ。若又能化師ヲシテ暫ク之ヲ指示セシムルノ要ニ供スベシトスルモ亦タ甚ダ不完全ト謂ハザルヲ得ズ。故ニ余ハ其活用ナキヲ憂テ此ニ別ニ圖ト能ク符合セシムベキ細密ナル傳記ヲ編スルニ至レルナリ。然レモ余ノ固ヨリ不文ナル。却テ家醜ヲ大方ニ揚ルニ過ズ。而モ唯實際ニ祖德ヲ宣揚センコトヲノミ慮リテ自己ノ不敏ヲ忘シタルナリ。讀者乞フ之ヲ了セヨ。

一 此書校閱ハ藹々居士。懇ロニ正斧ヲ給ハリキ且ツ。森口惠徹宗匠。篤ク贊助シテ之カ周旋ノ勞ヲ辱フセリ。二公ノ恩大ニシテ報ヒ難シ

一新製ノ圖繪ハ。便宜ト普及トヲ計リテ 高祖太祖各々一幅トナシ。對懸ナラシムル様製刻セシヲ以テ。夫レニ供スル圖解説モ亦タ高祖太祖共ニ編成セリ。而シテ太祖ノ圖解説ハ他ノ傳記ト多分ノ異想ナキニ付キ。敢テ校正ノ勞ヲ煩ハサ、ルナリ。

一 高祖大師ノ圖繪ハ。大概。建擿記圖會。ニ因ルト雖トモ。紙面ニ限リアルニ付感覺上重ナル所ヲ圖シテ餘ハ省キ

又。尤モ圖解説中○ノ下ニ悉ク順序ヲ追ヒ一代ノ傳記ヲ連テテ殘ル所ナシ。

兩祖ノ圖繪共其体載ヲ好クシ。正實ニ分明ニ注意ヲ務メタリ。尙彩色表裝ニモ殊勝分明ニ注意セザル可ラズ。一能化師ハ誕生會御遠忌月並教會其他ノ法筵ニモ法堂上ノ傍間ニ圖繪ヲ奉掲シテ。香華燈燭等ヲ供備シ。時々參詣ノ檀信者ニ對シ。丁寧ナル言語ヲ以テ。殊勝ナル説明ヲナシ。最勝ノ因緣ヲ增長セシムベシ。

明治廿九年八月

編者敬白

承陽大師 御行狀圖解説標目

○承陽大師之部

第一章 端緒

第二章 前生期 生育學識

- 第一 母公御懷妊の時大師の偉人たるを示す奇瑞の天告あり……………一
 - 第二 御誕生の後ち相者一見して聖人の相ありと稱贊す……………二
 - 第三 幼年讀書流るゝが如く其生知は時の名儒を駭かしむ……………三
 - 第四 母の喪に遇ひ香煙を見て無常を感じたまふ……………四
 - 第五 晝夜孜孜として世親菩薩の俱舍論を讀みたまふ……………五
 - 第六 關白の家を繼しめんとの評議ありしを大師聞たまひて益々出家の志を勵みたまふ……………五
 - 第七 暗夜に遁出して外舅良觀の許に到り出家を求めたまふ……………六
- 第三章 中生期(其一) 出家學道
- 第八 公圓座主に就て御剃髮……………七

- 第九 叡山の大家に法門を質したまふ……………七
- 第十 公胤僧正に付きて法門を質したまふ……………八
- 第十一 榮西禪師の許に往て法門を質したまふ……………九
- 第十二 晝夜を分たず常に一切經を閱したまふ……………十
- 第十三 遠く宋に至り大法を求めんと乗船出帆したまふ……………十

同 章

中生期(其二) 渡宋求法

- 第十四 明州に着て風俗を尋ねたまふ……………十一
- 第十五 初めて天童山に登りたまふ……………十一
- 第十六 宋土寺院の俗風を訂さんと宋帝に上表したまふ……………十三
- 第十七 天童山を去て諸方の知識を尋ねたまふ……………十四
- 第十八 知客の見識を試む……………第十九 元の鼎に見へて圖書拜覽……………十五
- 第二十 黃梅山の且過に宿して夢を觀じたまふ……………十六
- 第二十一 老進指揮して淨祖に參せしむ……………十七
- 第二十二 淨祖悟本大師を夢む……………第二十三 始めて淨祖に參見……………十八
- 第二十四 淨祖一日坐睡僧を呵す大師聞て大事を悟りたまふ……………十九
- 第二十五 方丈に登て所解を呈したまふ……………二十

- 第廿六 江西の途中猛虎を伏せしめたまふ……………二十一
- 第廿七 路上邊かに病て神樂を受けたまふ……………二十二
- 第廿八 淨祖に告暇して日本に歸らんとしたまふ……………二十三
- 第廿九 碧岩集書寫神人助筆……………二十四
- 第三十 大權菩薩隨束守護……………二十五
- 第三十一 觀音大士難風を鎮めたまふ……………二十六

第四章

後生期(其一) 歸朝化益

- 第卅二 御歸朝直に京都建仁に入たまふ……………二十七
- 第卅三 深草閑居……………二十八
- 第卅四 血脉を授けて義重が妾戀を救ひたまふ……………二十九
- 第卅五 始て寺を建て開堂法式を行ひたまふ……………三十一
- 第卅六 近衛殿にて御說法……………三十三
- 第卅七 法燈國師大師に參隨……………三十四
- 第卅八 雲州侯の宅にて御說法……………三十六
- 第卅九 越前に御下向……………三十七

同 章

後生期(其二) 山居饒益示寂

第四十 本山永平寺上棟式……………三十九

第四十一 結制堂上に天花降る……………四十

第四十二 諸天法式の廣大なるに感じて祥瑞を顯す……………四十一

第四十三 鎌倉將軍を御化導……………四十一

第四十四 玄明の穢心を呵して遂に擯出しまふ……………四十四

第四十五 異香の奇瑞顯はる……………四十五

第四十六 應供會放光……………四十六

第四十七 天皇大師の徳風を聞て紫衣等を賜ふ……………四十七

第四十八 靈山院に靈鐘を聞きたまふ……………四十八

第四十九 八大人覺御教誨……………四十八

第五十 永平寺を辭して御上京の途中御詠歌……………五十

第五十一 上皇醫官に勅して大師を診せしめたまふ……………五十一

第五十二 夜半偈を書して入涅槃……………五十二

第五十三 赤辻にて御火葬……………五十二

第五十四 御遠忌執行……………五十四

第五十五 承陽庵……………五十四

第五章 遺徳
承陽大師之部畢

○太祖國師之部

第一 國師の父母深く無常を觀じたまふ……………五十五

第二 母公祖墓に詣り子なきを歎せらる……………五十五

第三 御母香花院にて聞法……………五十五

第四 御母聞法感悟の意を御父に談話……………五十六

第五 御父母放生を勵したまふ……………五十六

第六 御母多稱の觀音を拜して一子を得んとを祈りたまふ……………五十六

第七 御母日輪を吞ひと夢見て妊娠せらる……………五十六

第八 國師御誕生……………五十七

第九 襁褓の中にて稱名したまふ……………五十七

第十 奇異の重病に罹りたまふ……………五十七

第十一 積石禮拜……………五十七

第十二 多稱の觀音大士を禮拜……………五十八

第十三 經史を讀みたまふ……………五十八

第十四 永平寺に登上……………五十八

第十五 御剃髮……………五十八

第十六 菩薩戒受持……………五十九

第十七 諸方へ行脚……………五十九

第十八 寂園師に參見……………五十九

第十九 法門御研究……………五十九

第二十 法燈國師に參禪……………六十

第二十一 入室傳法しまふ……………六十

第二十二 永平寺に御版省……………六十

第二十三 郡司城滿寺建立……………六十

第二十四 大慈寺に於て二僧參問……………六十一

第二十五 始めて授戒會執行……………六十一

第二十六 介祖より招請狀を受けたまふ……………六十二

第二十七 介祖に代り御說法……………六十二

第二十八 傳光錄開示……………六十三

第二十九 家尚公國師に參問……………六十四

第二十 信直公國師の受戒……………第卅一 御恩忌上堂天花降る……………自六十四至六十六

第卅二 永光寺建立異僧現す……………第卅三 永光寺應供會に奇瑞あり……………自六十七至六十九

第卅四 定賢律師觀音大士の靈告を感ず……………六十九

第卅五 觀音大士の靈告に因て國師を總持寺へ向はらる……………七十

第卅六 上皇の疑問に奏答せらる……………第卅七 放光菩薩の御靈感……………自七十一至七十二

第卅八 總持寺へ綸旨をたまふ……………第卅九 總持寺十條の龜鑑定まる……………自七十二至七十三

第四十 永光寺微恙を示したまふ……………第四十一 偈を書して掩然里化……………自七十三至七十四

第四十二 庭前にて茶毘し奉る……………第四十三 國師の舍利を總持へ護送……………七十四

第四十四 總持寺に於て法要勤行……………第四十五 總持寺組師塔廟……………七十四

太祖國師之部畢

承陽大師御行狀圖解說標目大尾
太祖國師

承陽大師御行狀圖解說

鷲岳道人編

○第一章 端緒

謹て按ずるに。我が大日本曹洞正宗開闢高祖と仰き奉る。越前國永平寺開山 佛性傳東國師承陽大師の京都の人。姓の源氏。畏くも人皇六十二代 村上天皇九世の苗裔。后中書王八世の遺胤。諱は道元希玄と号す。今其御俗系を示すこと左の如し。

○村上天皇八王六十二代 具平親王 二品中務卿 稱后中書王 師房 從一位太政大臣 寬仁四年始賜源姓

顯房 從一位左大臣 雅實 從一位太政大臣 稱久我家之祖 雅定 右大臣 雅通 從一位太政大臣

通具大納言

通親臣内大

通光太政大臣

○承陽大師

御母公ハハ。大織冠鎌足公たいしやくわんかみより十八代。松殿關白まつどのせき攝太政大臣たいてい藤原基房公ふじのらふの御女みむめあり。

○第二章

前生期

生育學識

第一(母公御懷妊の時大師の偉人たるを) 大師御托胎おほいのとき。彩雲空さいうんくうにたかびきて空中に聲あり。此兒このこハ五百年來肩かたを齊ならぶる者ものをかき大聖人だいせいじんあり。今日けふ日本國にっぽんこくに降誕こうたんせしむるハ弘法度こうぼうど生の爲ためめありと云々。母公はは欽あこみ齋戒さいがいして出誕しゅたんの期きを待ちたまふ。

第二(御誕生の後ち相者一見したてまつりて聖人の相ありと稱賛する圖) 人皇八十四代 土御門天皇

の御宇みよ正治二申年正月二日御誕生ましまししかば。異香室いこうしつに満みち。外そとかに溢あふれて浴湯よくとうも亦また殊ことに芳香かきを放はなつに至いたり。と云。相者あひま拜顔はいがんして駭おどろきて云く。七處平滿しちじよへいまんして眼めに重瞳じゆうどうあり。是こゝれ凡流ぼんりゆうにあらず。必ず人天にんてんの大師おほいあらん。古書ふるしよに曰いはく。人聖子にんせいしを生なずるときハ。其母命そのははあやうし。と令兒七才みこの時。必ず母公はは死したまそんと。母公はは是こゝを聞ききたまへども。驚疑おどろせず。怖畏おそせず。増まく。愛敬あいけいを加くへたまへり。

第三(幼年にして讀書流るゝが如く其生) 建仁三癸巳年けんにんさんみづのえ大師御年四歲おほいにし。知しは時ときの名儒なみゆを駭おどろかさしむる圖。李嶠りけうの雜咏ざいよ。唐代人たうだいじん宇巨山うこさん成なり詩百三十首しひやくさんじゆしゆ。一也ひとしよ。を祖母そぼの膝上ひざうへに讀よたまふ。誠まことに拔群はつぐんの俊才しゆんさいあらずや。故ゆゑに耆老しよらうの諸儒しよゆハ

見て讚して曰く眞に畏るべき大器なり是必ず神童か
 るべしと ○建永元丙寅年 大師御年七歳毛詩左傳等を慈父の膝
 下に讀み畧ほ其大義に通曉したまふ是れより師訓を
 待たずして諸經史の意義を貫きたまふかぞ實に古今
 聖人中比ひ稀れかる御方あり

第四母の喪に遇ひ香煙を見承元元丁卯年 大師御年八歳の冬御母逝
 去ありければ人皆言ふ一年違ふと雖も果して相者の
 言に違せずと大師の悲歎譬るに物かして而て喪に居た
 まふの際適々香煙の散滅するを見て窃に世間の無常
 を觀下浮世の榮花皆此香煙に齊きことを悟りて深く
 出離の志を起したまへり。

第五晝夜孜孜として世親の承元二戊辰年 大師御年九歳にして世
 親菩薩の俱舍論を讀みたまふ學者常に言ふ此書を學
 ふに八八年を費すべしと然るに今大師幼年にして大
 畧此義を諳んたたまふ人其理義を問へば答釋流るゝ
 が如く其利根あること文殊菩薩の如し衆をして大に
 感歎せしむ尙勤學に意を勵みたまひて晝夜怠りかか
 りけり。

第六關白の家を繼しめんとの評議ありしを大師外舅攝政關白師家公ハ
 深く大師の英敏を愛し之を猶子とあして攝關重職國
の切要を王臣の師範役なりの家を嗣しめん爲め元服せしめんとの御
 評議ありけるを大師密に聞きたまひて謂へらく苦樂

常かき身を持って世事更に想ひあし。早く出家修學して其道を得。而して後ち生死に迷惑する衆生を救ふころ最上の望みかれと。大願心を發したまひて求法の心愈堅し。

第七(暗夜に遁れ出て、外舅良觀法印の許に到り出家を求めたまふ圖)建曆二年(申壬年)大師御年十二の春。或夜ひそかに木幡山の別莊に逃出し。次で叡山の麓におわす外舅(大師母の公の兄)良觀法眼の許に到り出家を求めたまふ。法眼の意外の懇望に大に驚き問たまさく。元服も既に近しと聞く。今出家したまはゞ一族の更かり松殿攝政の憤りあらん如何にそやと。噴めたまるは大師從容として答へたまさく。我悲母逝去の時遺囑して云く。

汝當に出家學道して我後世を吊ふべしと。我爲に恩を報せんことを思ひ。殊に浮世の榮華かど頼むべきに非ずとて。聞入たまふ様子かければ。法眼感涙し其志の奪ふ可らざることを知て遂に出家を聽したまへり。

○第三章

中生期(其一) 出家學道

第八(公圓座主に就て御剃髮の圖)建保元年(癸酉年)大師御年十四四月九日天台宗叡山の座主公圓僧正に就きて綠髮を落し。同十日延暦寺の戒壇に於て僧正より菩薩戒を受けたまふ。蓋し公圓僧正の當時顯密無双の碩學淨行持戒の高僧ありき。第九(叡山の大眾に法門を質したまふ圖)大師已に得度受戒の御儀式も濟せられければ大に喜びたまひ。是より二年間叡山にありて。

天台の宗風並に諸經論の蘊奧無量の教理を探究し孜々として晝夜懈りたまわざりしが十五才の御時大疑あり謂く顯密兩教共に本來本法性が天然自性の身ありと談ず。若し此の如くからは我等一切衆生の身が其儘天然の佛あるべし果して然らば三世の諸佛何に由りて更に發心修行して菩提を求むるやと。之を耆宿に質すに確と答ふる者あし。大師甚た未解を憂ひたまふ。第十(公胤僧正に付きて法門を質したまふ圖)園城寺公胤僧正(大師の外叔父)の觀心に名あり衆之を佛法補處の人と稱するの明匠ありき。或時觀心の御咏あり云く。我が心また晴やらぬ秋霧に。ほのかに見ゆる有明の月と。大師其芳名を聞き急ぎ往し所疑

を問ひたまふ。僧正云く。貴僧の所疑は天台の奥義あり。輒く答ふ可らず。且つ宗義ありと雖とも恐くは理を盡さず。須く建仁の榮西禪師の室に入て其故實を尋ぬべし。我れ聞く榮西師は先年宋土に在て不立文字の宗旨を得たりと。僧正の指揮甚た懇切かりき。

第十一(榮西禪師の許に往て法門を質したまふ圖)大師御年十五直に建仁開山千光國師榮西和尚の室に入て前疑(第九の疑問)を質したまふ。和尚答て云く三世の諸佛不知有狸奴白牯却知有と大師忽ち省あり。此に於て専ら禪道に力を勵みたまひしが不幸にして翌年七月五日和尚示寂せられけり。を以て其嗣明全法師に従ひ佛祖正傳の大戒を受けたまふ。

第十二(晝夜を分たず常に一切經を誦したまふ圖)貞應二年(癸未)大師御年廿四建仁に在まずこと九年にして一切經を周覽したまふこと二回。晝夜を厭はず寸陰を捨てず積功の恩賜皆是れ吾人の大明燈にあらざらんや。

第十三(遠く宋に至り大法を求めん乗船出帆したまふ圖)大師の慈眼もて衆生を見たまへば。苦海に没在して冥より冥に入り苦より苦に入る憐れさ。云何して之を拔濟すべき。我れ爲めに正師を求めて此道を得んと欲すれども日本國に其人なし渡海入宋して正師を得ばやと。時に明全師も亦渡宋の志ありければ。二月廿二日師と共に建仁の祖塔を禮辭して洛を出で博多出帆の商船に打乗りたまひて三月下旬纜

を解き吾等衆生を救はんが爲め眞如の月を輝かし。無漏性海を照さんと。雲間遙に萬里の他郷にぞ趣きたまへり。

○第四章 中生期(其二) 渡宋求法

第十四(明州に着て風俗を尋ねたまふ圖)海上十余日にして難かく漢土明州の港に着きたまふ頃。四月上旬にて翌五月尙ほ碇泊し。五山等諸大刹の様子かど探りたまひし折柄。一日育王山の典座大用と云る者船裡に來會し。大師と辨道文字の義を論ず(大清規の典座教訓に其因縁を記したまへり)時に南宋の嘉定十六年(癸未)あり。

第十五(初めて天童山に登りたまふ圖)秋七月天童山の無際了派禪師に參

見し。一年間該寺に安居したまふ。初め俗風に習ひてか
 他邦人を賤み啻我か大師のみからず明全和尚をも唐
 土平僧の末席に着かしめたるの非法ありければ大師
 其僧席の不次第あるを責て曰く。釋氏の法臘に依りて
 排座を定むるを道とす。然るに何ぞ違法の甚しき是の
 如くあるやと。耆宿等蔑如として曰く。前朝已に日本よ
 り來れる僧に最澄空海及び榮西等あれども。皆中華叢
 林に入るときい之を新戒に列せしむ。是舊例あり。今復
 た更に改む可にあらざと。大師聞て深く歎て曰く。先
 佛の規範凡情に落ること悲むべし。我れ法の爲めに之
 を正さざる可らずと。吁々實に矯弊如法の聖慮ぞ思ひ

第十六

(宋土寺院の俗風を訂さんとて宋帝に上表したまふ圖)

大師僧臘の不次第を述て宋

の寧宋皇帝に上表したまふ。然るに朝議を曰く。是より
 先き最澄空海榮西等の例もあり何ぞ今ま新しく之を
 改むべきやと。朝議紛芸未た勅裁あらざりしかど。大師
 を固く佛制のあるありとて再び上表したまひければ。
 宋帝勸感太た厚く。遂に天童及び諸山に詔して戒次を
 訂さしめらる。禪林の宿弊始て革正を得る者ハ偏に大
 師の力あり。是に於て大名四百余州に著りれ。吾國の光
 輝を唐土にぞ舉げたまふ。○又天童山に辨道せられ
 しとき。隣位の僧の袈裟を頂上に戴きて而して後に之
 を浴けたるを見たまひて謂ひたまひく。如來八萬の寶

藏を奉ずる者に非ざれば之を被すること能はず誠に
福田の衣あり古昔に其教を聞て今時に其行を見る。嗚
呼佛子たる者斯の如くせざる可らずと大に感歎まし
ませしも此頃のことありき。

第十七（天童山を去て諸方の知識を尋ねたまふ圖）

いつしか二度の春秋を過して大

宋の寶慶元年

（寧宗崩御し理宗即位の年号なり日本の嘉祿元年に當る）

大師御年廿六屢々

禪師より悟道の許可を蒙りたまへども自ら足れりと

そしたまはず猶諸山遍歴の御思想深くましくして此

春遂に天童を降り衆生を憐む御心に跋山涉水其身を

忘れ先づ徑山に登りて浙翁如琰和尚に參見し（問答あり

光録に見ゆ）又天台山育王山等の巨刹を巡參し又台州の盤山

思卓禪師に參したまふ。

第十八（知客の見識を試みたまふ圖）

再び育王山に登て成珪知客と其廊壁に

圖する所ろの佛祖正佛の第十四代ある龍樹菩薩圓月

の相を論じ大に知客をして勘驗したまふ。

第十九（元鼎に見へて嗣書拜覽の圖）

或時平田の萬年寺元鼎禪師に見ゑて嗣

書を拜見したまひしが元鼎曰く嗣書を從上の佛々祖

々傳承嗣續の系譜にして吾宗の外これを傳承する者

あらず吾れ曾て大梅山法常禪師を夢む法常云く若し

既に船舷を超へ來る實人あらば華を惜むこと勿れと

今老兄船舷を超へて此地に來る正に之と符合す故に

親しく之を見せしむと大師之を見聞したまひて信感

極きまはりりかし。燒香禮拜。供養恭敬。且かつ思惟しゆいしたまいく五家七派。或あるは多少の差異さひかきにも非あらざれども概おほね釋迦牟尼佛より嫡々相承して一器の水を一器に移うつすが如ごとき正法眼藏しやうほうがんざうの承傳しやうでんハ吾われか佛心正宗ぶつしんしやうしゆの外更ほかにある可べらずと。復また是より先まづき天童山に安居の日雲門下法眼うんもんげほくがん下等の嗣書しゆいよを或僧より拜見はいけんしたまひて斯かる正ただしき佛法を聞くことと誠まことに佛祖の大恩だいおんありとて辨道べんどうに餘念よねんかかりしが今又佛祖の冥資めいしに依りて此大事を見聞けんしたまふや深ふかくく悦よろこの程ほど限りかかりきとぞ。

第二十(黃梅山の且過に宿して夢を觀したまふ圖)大師前段の因縁に依て感涙袖かんだいそでを霑うるしたまひ。路上大梅山護聖寺みちのかみに詣り大梅祖師を供養くうやうし

上たてまつりて且過たんがに一宿ひとしよしたまひしが大梅祖師來て一枝の梅花を授くと夢みたまふ。大師を實に古聖と齊ならしく道眼を開きたまふが故に數軸すうじくの大事を拜し冥應めいおうのつげ親おやしかりけるぞ道理だうりある。

第廿一(老進指揮して淨祖に參せしむる圖)大師遍あまく諸方の名山みやま巨剎きよつを遊歴ゆうれきして有名の善知識と覺おぼしき人にも悉く參せられしも未いまた此道に厭足するの師に遇あひたまふと謂いわく再び天童山てんどうさん了派禪師の許もとに歸かへるに如ごとかずと而して途中了派禪師の示寂しじやくを聞き慨然がいぜんとして欲望よくぼうの道を失うひ兎とやせん角かくやせんと暫しばし思惟しゆいに沈しづみたまひしが今更いま天童に飯いひるも益えきあしと思召おも召めして遂ついにに飯東の想おもひを起たしたまへ

り然るに翌日途中老進と云へる偉僧(衣服は賤相見るに忍びず容貞は威猛く凡容に非ず)定て羅漢の化身(ならんと疑ふ)に逢ひたまひしが僧曰天下の宗匠如淨禪師に如かず頃日勅を奉じて瑞巖より天童に移住せらる貴僧の師を即ち是かりと云畢て去る此に於て大師の喜悅喩るに物なく急ぎ天童山に登りたまへり。

第廿二(淨祖悟本大師を夢みたまふ圖)五月朔辰天童山の如淨禪師を空位に

饗を具へて待つことある者の如し侍者之を異とし其の所由を問ふ淨祖曰く昨夜夢に洞山悟本大師を迎ふと感ず今日必ず異人の來るあらんを待つのみと

第廿三(始めて淨祖に参したまふ圖)五月一日大師再び天童に登て始て如淨

禪師に参謁したまへり禪師直ちに曰く佛々祖々面授

の法門現成せりと大師燒香禮拜乃ち片簡を奉呈して

請益の悩を述べたまふ(委くは載せて寶慶記にあり)淨祖左右に告て曰く

日本僧恐くは悟本大師の再來からん我宗此人に憑て

大に世に興らんと歡躍尽ることおかりき ○當時明

全和尚を病を以て天童山の了然寮に臥せり大師見て

駭きたまひ看病殊に篤し然れとも生者必滅を遁れ難

く四十二歳を以て化を他方に遷さる大師禮を篤くし

自ら遺体を舍利とかし之を供養して飯國の際京都建

仁寺に納めたまひけり

第廿四(淨祖一日坐睡の僧を呵す大)大師是より晝夜の別なく淨祖

に参問頻々たり或日淨祖僧堂裡に巡看し坐睡の一僧

を呵責して曰く。參禪を須く身心脱落あるへし只管に坐睡して何をか爲すに堪へんと。大師傍に在て之を聞きたまひ。豁然として無上菩提を悟りたまふ。

第廿五 (方丈に登て所解を呈したまふ圖) 直に方丈に登り所解を呈して親しく淨祖の印可を受けたまふ。時に廣平侍者傍にあり曰く。外國の人恁麼の事を得たり。誠に細事に非ずと。實に是れ涅槃妙心現成の時節。八萬の寶藏此中にあり。我宗何んぞ聖道淨土難行易行。自力他力の小區域に偏して新に立教開宗したる者からんや。釋迦牟尼佛直傳の口訣ある佛心正宗 (佛在靈山或時以梵王所獻金色婆羅華一登座示衆人天百萬悉皆罔措獨金色迦葉破顏微笑佛言吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門一附屬摩訶迦葉可知迦葉嗣阿難阿難附和修等祖々而稟之心印口訣なることを) にして期する所也。直

に衆生をして佛知見を開示悟入せしめんと。かり聖淨難易。八萬の法門を皆是れ涅槃妙心の奴隸たり。淨祖或時曰く。吾宗の佛法の總府ありと。大哉大師吾宗を傳承したまふ。所以此にあり。又淨祖常に示して曰く。吾れ汝を得たること釋尊の迦葉を得たまふが如しと。遂に寶慶元年九月十八日。佛祖の大戒を受けたまひ。如來より五十一代の祖位にぞ列したまひける。

第廿六 (江西の途中猛虎を伏せしめたまふ圖) 大師一日江西に遊歴したまふ途中。日暮蒼然人絶へ道迷ふ。忽ち猛虎あり。大師を瞰取し去んとす。大師柱杖を座右に安して。岩上に端坐。儼然たれば。猛虎怖畏して。忽ち去る。此事大師御在世にぞ知る者

あかりしが。曾孫寒岩禪師入宋の時。諸方の叢林に此事蹟を圖畫しあるを視て其由を尋ねたまへば。人前記の因縁を示すに依り。寒岩禪師の深く是れを感ず。不可思議の事蹟ありとて。自ら摸寫して。皈朝せられける。之に由て我國の人々喧傳して。益々大師の聖徳を仰感するに至れるあり。而して其圖及柱杖今尙現存して。江州大津の青龍寺に寶藏すと云ふ。俗に驅虎の柱杖と云へり。

第廿七（路上遽かに病て神薬を受けたまふ圖）大師また遊歴して天童に皈りたまふ半路遽かに病惱に罹りたまふ。病勢既に募り尊命將に危からんとす。從侶の道正の大に驚ろき斯る人跡絶はたる曠原にも醫薬を求むるにも方なく唯た痛哭す

るのみかりしが。偶々神人現れ一の丸薬を與へしかば病忽ち愈ゆ。道正怪みて斯る靈薬を授けたまふ御身の何人にをいすぞと問へば。吾の日本の稻荷明神あり。常に大師の求法を加護す。今の暫く師の急難を救ふのみと言訖りて化滅す。薬法の道正の傳ふる所とありぬ。即ち解毒萬病圓是あり。

第廿八（淨祖に告暇して日本に皈らんとしたまふ圖）寶慶三亥丁年大師御年廿八既に涅槃妙心の佛心宗を得て法味に飽満したまひ。我日本國に皈らんと淨祖に暇を請ひたまふ。是より先き一の神人あり大師に言て曰く。道已に成り時已に至る。皈朝して早く衆生の爲に無勝幢を建てたまへ。此地に淹留し

たまふこと莫れ我れ隨東して二輪の轉するを奉護せん。と大師不思議に思ひたまひて。汝何人ぞと問ひたまへば。神人曰く。吾は是れ韋馱將軍なり。と言終りて化滅す。此に於て、半夜に入室傳法あり。淨祖手自から芙蓉楷祖の法衣。寶鏡三昧五位顯訣。並に自贊の頂相を授けて信を表す。且つ曰く。你の頗る古貌あり。直に深山幽谷に居して佛祖の聖体を長養し。廣く衆生を利濟すへし。敢て城邑聚落に住すること勿れと。懇切に示したまひければ。大師の喜悅限りあかりけり。

第廿九

碧岩集書寫神人助筆の圖

大師皈朝の前夕始めて佛果圓悟禪師の碧岩集を看たまひて甚た意に叶ひ手自ら謄寫し皈ら

んと徹夜燈下に筆を執りたまひしも。何分全部十卷の大冊あれば。夜もや四更に垂んとするも未だ其半に達せず。心大に之を憂ひたまふ。偶々白衣の神人化現して筆を助くるあり。幸にして遂に畢卷を得るに至る。大師怪みて神人に問たまはく。子は是れ何人ぞ。神人云く。吾は日本の白山妙理權現あり。大師求法の心の切あるに感し。常に左右を擁護す。今の事の迫るを見て之を助くるのみ。と言訖りて化滅す。其書今尙ほ加州大乘寺に在り。是を世に一夜碧巖とぞ云ひつたるけり。

第三十

大權菩薩總東守護の圖

翌日皈舟を寧波に解き。招寶山下を過ぐ。神人手を額にして舟舷に化現し。大師に告げたまはく。

身の是れ大權修理菩薩あり。大師今日如來の正法を傳
佩して歸朝せらる希くハ扶桑に從ひ行きて永く大師
の正法を護持せんと言訖りて化滅す。今洞下の諸寺に
右手を額上に揚げたる尊像を安置するもの是あり。

第卅一(觀音大士難風を
鎮めたまふ圖)

遙に宋土を去りて日本國に歸らんと
したまひしが頃ハ臘月のことにて北風暴く雨雪急に
して一天墨を潑くが如く怒濤天を拍ち舟將に覆へら
んとす。船中の狼狽一方あらず。時に大師ハ儼然舟舷に
端坐して一心に觀音普門品を諷誦したまふに「假使黑
風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱觀世
音菩薩名者是諸人等皆得解脫羅刹之難」の文の所に

至て忽ち闇空に一點の光明あり觀世音菩薩一葉の蓮
花に乗して海上に泛へるを仰看たまひければ風波已
に鎮靜し湛々として再び波濤風雨を見ず海上十余日
を経て我日本人皇八十五代 後堀河天皇の御宇安貞
元年十二月中旬肥後河尻の津に着したまふ大師難船
の際仰看したまふ所の觀音菩薩の像を自彫して祀り
たまふ肥後の河尻南溟山觀音寺の本尊是あり嗚呼大
師の威德菩薩も神人も常に擁護して事々に靈感あり
しこそ不思議かれ

○第四章

後生期(其二) 歸朝化益

第卅二

(御版朝直に京都建
仁寺に入たまふ圖)

安貞二子戊子年(大師御年廿九)正月陸行

AKENAGA

し初めて千光國師の遺跡たる京都東山建仁寺に入ひかしやまた
まひまほ寓居三年普勸坐禪儀を撰述したまふ。是れ大師最
初はつしめの著書ありし爾來御在世僅か二十六年間にして著
作したまひし書甚た少からず曰く正法眼藏九十五卷
清規二冊廣錄十卷其他數部あり然るに大師尊命の延
長からさるを以て尊意満足にぞ思召おもほせさすと雖とも其
法乳の徳汁を哺み己に七百年來吾宗門下の渾身を長
養し以て沙界に溢れぬ其洪恩何を以か報すべけんや。
第卅三(深草閑居の圖)寛喜二庚寅年(大師御年卅一)建仁を去て深草
の安養院と云へるに閑居したまふこと四年此間風月
に逍遙し聖体を涵養したまふ閑居偶作詩偈道歌數首

あり其一に曰く生死可憐雲變更迷途覺路夢中行唯留ま
一事醒猶記深草閑居夜雨聲又曰く双忘取捨思憊然
萬物同時現在前佛法從今心既盡身儀向後且隨緣而ニ
草木を接して閑々如たり心月を輝かして綿々如たり。
されど玉氣ある所彩雲必ず起り桃李物言ざるに其下
自ら蹊を成す歸宗の緇白自然に其徳を慕ひ群來して
參禪聞法す同曆三年八月の頃辯道話を撰述したまふ。
第卅四(血脉を授けて義重か)波多野出雲守藤原義重か越前を領
知せり愛妾あり夫人之を嫉む義重命を奉して京師に
到るの留守夫人之を好機として人を頼み妾を殺して
池底に沈めしむ妾の怨魂忽ち厲とあり往々叫喚の聲

をかす。一僧あり之を村民に聞き往きて池邊に屈まが伺まをす
 ること終夜す。三更に到て俄かに暖風起り水波鼓す。一
 女水面に浮うかび僧前に涕なみだ泣なす。僧故を問ふ。妾其由を語り
 且つ曰く鬱憂解けず。吊祭到らず。冥府の拷かう證しん止むとき
 かし。願くそ義重公に告げて冥福を修せしめたまへと。
 僧其証を求む。妾の厲れい自じ袖そでを解て與へ。忽ち空相に歸す。
 僧速かに京師に至り義重に故を告ぐ。義重愁歎しゅうたんし茫然ぼうぜん
 として暫く不安あり。明日僧と同く深草に到り。大師に
 救濟を乞ふ。大師僧に托たくして正傳の戒脉を授けしめ曰
 く。之を獲る者の菩提を成せずと云ふことかし。我爲われために
 靈に授くと。僧拜持して疾く行き之を池中に向て授く。

靈忽ち形かたちを現して拜受歡悅限りかし。遂に去て空中に
 聲あり。謝して曰く。我今無上の妙法を得て。頓に冥苦を
 脱だつし。疾く道果を成ずることを得たりと。遠近聞きこく者悉
 く奇特きせきと稱し。在京の義重之を聞て喜ひ一方からず。後
 に傳つたへて血脉池と稱す。今尙ほ永平寺の近邊にあり。(義重の
永平寺を建るは敢て此因縁に依るに非ず固と永
平寺を建る所以は第三十九に至りて審かなり)

第卅五(始て寺を建て開堂法
式を行ひたまふ圖)大師の道譽いよの愈月卿。雲客道。俗貴
 賤の渴仰かつかうする所とありて。群をかし隊をかすこと水の
 低ひきに就つくが如し。此に於て。大法學揚の時機漸く到り
 しかば。貞永元辰壬年(大師御年卅四)の夏より發願して。深
 草郷の極樂寺と云ふ寺跡に就て興聖寺を建立せんこ

とを謀り天福元己年正月落成す。大納言教家公等の建立にて、日本に純然たる禪刹叢林あるの實に之を始とす。四條天皇大師の道風を仰き興聖寶林禪寺の勅額及び禪宗開立の勅許を賜ふ。是より先き千光國師榮西和尚入宋傳法して歸朝せられ建仁寺を洛東に創して禪宗を開立せんと欲せられ。百方盡す所ありしも許されず。遂に顯密禪の三宗を置かる。(委くは傳光錄五十)和尚の遺憾幾何ぞや。然るに聖人の無爲にして化すと。大師の徳風朝野に聳動し。叡感自然茲に及へり嘉禎二寅年十月十五日初て開堂法式あり。衆に示して云山僧歷叢林不多。只是等閑見天童先師當下認得眼橫鼻直不被人瞞

便乃空手還郷。所以一毫無佛法。任運且延時。朝々日東出夜々月沈西雲收。山骨露雨過四山低。畢竟如何良久曰。三年逢一閏雞。向五更啼。良久下座したまふ。此に於て。宗風漸く扇さ雲水の群集半百に過たり。神明來て聽戒し。布薩毎に參見したまふ。復殊勝ある住山。前後十有一年。凡そ禪林必須の道具法式等備りぬ。正法眼藏の撰述亦頗る多しとかや。

第卅六(近衛殿にて御說法の圖)爾來化導益々開け公卿大臣競ひ請て聞法得益。虛日かし仁治三申年(大師御年四十三)四月十二日。近衛殿に謁し御法談ありし序で。前來吾國に此宗を傳ふる者ありや否やの御問あり。大師答曰く以心傳心

の佛心正宗を吾國に傳ること實に今を始とす。名相の佛法を傳る者ハ先代より多しと雖とも。唯た仙藥の能書のみ。未だ七佛家傳の藥劑を得ざるありとの意を以て懇切に佛心正宗を傳へられし御謂ハれを述べたまふ。近衛攝政を始とし拜聽の人々。感歎限りあし。其他請に應して在家に説法したまふこと一百余所。授菩薩戒の弟子二千有余に及べり。

第卅七法燈國師大師に參隨したまふ圖 他宗の人にして。大師の高徳を仰き歸依傳戒せられし人も亦多き中に。臨濟宗由良の興國寺開山法燈國師覺心國師年三十六興聖寺に掛錫して菩薩戒を受けられしこと元享釋書にも見ゆ。淨土宗三祖鎌倉光明

寺開山記主禪師良忠。同く京の九品寺明覺上人も。大師の道德を慕ひ法問を拜問せらる。眞宗の親鸞上人も法門を聞て深く利益を得て喜ばるゝこと。俊光院に與ふる書に見へたり且つ東京淺草報恩寺に大師より上人に贈りたまへる拂子及團扇ありと云。又日蓮上人の大師に參せられたることハ上人の年譜に曰く曹洞道元自宋歸而倡宗於都下。上人往問其道。ことあり其外他門の人々道を問ひ法を聞きたまふこと甚た多く。遂に宗旨を改め衣を更て御弟子と成らせられし人も亦少からず。是より先き。開堂法式の際首座の職に就かれしハ孤雲懷奘禪師あり奘は傳光録にあり禪師ハ元と天台宗の僧

にして。中頃覺晏上人の弟子とあり。上人の遺命により
 法徒。懷鑒。懷照。懷義。と共に大師に歸屬せられ孤雲禪師
 の遂に曹洞宗第二祖に列せらる。又寒岩義尹禪師と
 後鳥羽天皇の皇子にして。初め天台の僧ありしが。大師
 に歸依せられ。二十六歳にして大事を授かり。後ち入宋
 中に大師示寂したまひしを以て。御法孫徹通禪師の法
 脈を嗣續したまへり。

第廿八(雲州侯の宅にて御説法の圖)同年(仁治三年)十二月十七日。波多野出雲守藤

原義重の請に應じて其宅に到り。甚深微妙の法門を説
 示したまふ。義重を首め。諸の道俗。欽仰感歎尽るところ
 かかりけり。義重の大職冠録足公の遠孫にして。鎌倉將

軍の御内に。弓馬に名高き人ありきとかや。

第廿九(越前に御下向の圖)當時。化導を蒙りたる。王公諸卿を畿の内外

の勝地に布金し。精舎を建て大師を迎請せんと欲し。地
 を擇はるゝこと十有三ヶ所に及ぶ。大師之を歴觀した
 まひしかど。皆聖懷に愜はず。屢々隨徒に謂て曰く。我れ
 喧鬧を避け閑靜ある青山白雲の間に安居し。以て廣く
 法界の衆生を度せんと欲す。今復頻に公卿に接近する
 吾意に非ずと。茲に義重の知行所ある越前國吉田郡の
 深山裡に。四百年前よりの古寺跡あり。此に一寺を創立
 して大師を供養したてまつらんと。義重の懇請ありけ
 るを。大師喜ばせたまひて曰く。幸ある哉。先師如淨古佛

日深山幽谷に晦跡して佛祖の聖体を長養すべしと。且つ先師を大宋越國の人かりき。然るに今越といふ名を聞たにもあつかしく甚た我所望に契へり。斯く越國と聞く上を速かに下向すべしと。義重大に歡喜して曰く。我が邊地の山間に下向あらせられ。御化導を蒙る。是全く國の運あり。又當家の幸ありと。寛元元年癸卯大師御年四十四七月十六日。遂に法駕を迎へて京を發し同月未に越前志比の山間に入らせたまふ。

世を兎角流れ易きものあるに當時宗匠として南都北嶺の人々を、かた眞實の道心なく唯僧位僧官を競ふの風のみ盛にして名利の穢心全く蛇蝎の有様

かりにし大師を獨り御心の淨潔にましくて興法度生の念甚深きにより宗徒の將來を鑑識し廣く衆生を度せんが爲め正法をして名利世庄の境域に墮落せしめさらんとを慮りたまひしかり

後生期(其二) 山居饒益示寂

第四十(本山永平寺上棟式の圖) 大師最初を松岡の溪の奥かゝる吉峰に御

留在ましましまし、が後に禪師峰に移寓せらる。禪ぜん斯せい記きに

雲州太守並に今の南東郡の左金吾禪門覺念(眞柄備中守同左馬助の先祖)

相な共に寺を建立せんと欲し。莊内山林便宜の處を尋

ぬ。即ち市野山の東かきまつ傘松の西に寺庵相應の地を得て歡

喜す(中略)雲州太守手自から山を平らたいげ地を拽ひき云々と

あり寛元二辰年（大師御年四十五）三月十九日漸く荆棘けいぎさくを拂ふて茅茨ぼうしを葺ふき土木を挽ひきて祖道を開演せんことを企くはて給たまひしが遂に四月廿二日柱立はしらたての式あり次の日上棟式を行ふ同年七月十八日開堂の行式ありて寺號ごうを大佛寺と名く（蓋し義惠公の法名を取る公復た一名を如是居士とも云）乃ち開堂の頌あり曰く諸佛如來大功德諸吉祥中最無上諸佛俱來入ニ此處是故此地最吉祥と此日龍神雲を起し雨を降す草木叢林悉く吉祥の瑞氣めいぎを顯あらせり。

第四十一（結制上堂に天花降る圖）斯くて寛元三年己乙（大師御年四十六）四月十五日結制上堂したまひしに清香馥郁ぶくよく天華空に散し（たか）恰あたも飛雪滿空の如くに法席に積りけり參詣の人々

未曾有かりと感聲雷堂かんせいらいどうす ○寛元四年丙年（大師御年四

十七）六月十五日の上堂より大佛寺を改めて永平寺と稱せらる（蓋し后漢明帝の年號にして佛法東漸の因縁より引來りぬ）

第四十二（結大法式の廣大なるを感じて祥瑞を顯す圖）寛元五丁年（大師御年四十八）正月十五日布薩說戒の時五色の祥雲しやううん變かはりて暫く左右の障子に照映しやうえいして去らざりしを誠まことに佛祖諸天の感應溢あふれて此に及びしかりとかや ○又道正庵に秘藏せる立春大吉（文字八十五行）を書せられしも此頃の事あるべし

第四十三（鎌倉將軍を御化道の圖）大師と山谷に跡を晦くましたまへども其道譽うたを益々世の貴賤衆人の渴仰かつおうする所とあり寶治

元丁未年(二月廿八日改曆)七月鎌倉の執權北條時賴(最明寺殿道崇と法號す)大師の座下に特使を遣して懇請ありしに依り八月三日鎌倉に行化したまふ時賴大に喜び弟子の禮を執り款待甚た厚く只管に其針鋸を受け一大事因縁を究尽し次第で菩薩の大戒を傳承し歸仰尽ることかし時賴の外幾多の人衆授戒せる者其數を知らず時賴永く師とし事へ奉らんことを思ひ此に一字を創立し(今の建長寺是れなり)永留を懇願すれども大師を永平寺のあるありとて固く辭したまふ鎌倉御化導己に八ヶ月此間時賴の需に應し御詠歌十首ありと云ふ其中に「荒磯の波もゑよせぬ高岩にかきもつくへき法あらむこそ(教外別傳)世の中を何に

たとへん水鳥のいしふる露に宿る月影(諸行無常)等かり又或時時賴に論して曰く臣民として皇祖皇宗の統治すべき國家の大權を收斂するを不臣の罪之より大なるいかし何ぞ速に之を辭して出家修道せざるやと大に國家の政道を説示したまふ時賴大に感服し爾來皇恩に報答して自ら徳を修め仁を布くことに勤めたれども未だ大權を奉還すること能はざりき而して寶治二年二月十三日を別れとし越前に御歸山ましませり歸山上堂の偈に曰く山僧出去半歲余猶若孤輪處大虛今日歸山雲喜氣愛山之愛甚於初也 ○又去年蘭溪禪師宋より來り博多圓覺寺にありて大師に書簡を

呈せらる。本年孟冬(寶治元年鎌倉御化導のとき)座下に着せり。入道時頼之を請して建長寺開山とす。○又永平寺の山號を吉祥山と稱せられしも今年のことありき(蓋吉祥は帝釋宮の名及び佛成道の座章に取と云ふ)

取と云ふ)

第四十四

(玄明の穢心を呵して遂に擯出したまふ圖)

最明寺時頼ハ益々大師の道風を欽仰し。越前六條堡(はら)に於て二千石の地を永平寺に供養せんとす。大師固辭(かたくこぼ)して受けたまえず。剩(あまつさ)へ御弟子の玄明首座其寄進狀を持ち來て衆中に誇示(こほし)し。頗(なほ)る得色(とくしき)あるを聞(きこ)しめして責めたまはく。汝穢心(たごころ)の念(ねん)甚し万劫(ばんがく)にも淨除(じやうじゆ)すべからずと。即時(ごとき)に脱衣(だつぎ)擯出(へんしゆ)し。常に玄明が坐臥(ざが)せし所の床(ゆか)を截除(せつじゆ)し。床下の土(つち)をも不潔(けがれ)ありとて

三尺余り穿(うが)ち棄(す)て、合山大衆の後來(のち)を鑑誠(かんじやう)したまへり(と)云ふ。誠(まこと)に大師の御心(ごころ)淨(じやう)らかあること日月の如し。古今聖賢中恐(おそ)らくそ比類(ひれい)稀(まれ)あるべし。傳(つた)へて曰ふ。大師滅后百三十年の頃。行脚(なげ)の一僧伊豆(いづ)の箱根山を通過(つうが)せしに。忽(たち)ち一仙僧あり途(みち)を共にして曰く。吾(われ)を越前永平寺の玄明首座と云者あり。曾(まづ)て大師の正法寶海に入る(まゐ)ると雖(なほ)ども空(むな)しく千生の一大事を錯(あや)りたりとて。大師御在世(せい)のこと(こと)を物語(ものがた)りし。悲泣(かなしみ)感涙(あはれ)して別(わか)れたりとぞ。第四十五(異香の奇瑞顯はる圖)此年初夏(なつ)より仲冬(ふゆ)の間殊勝(じゆじやう)ある異香(いこう)僧堂(そうどう)の内外(ないがい)に薰(か)し日夜(にちや)芬然(ふんぜん)たり。聖居(せいきよ)の瑞氣(すゐき)衆(しゆ)をして益々感歎(かんと)せしむ。

第四十六

(應供會放光の圖)

大師曾て

如淨禪師に參見を得たまひし

を。全く羅漢の化身ある老進の指揮に因れるありとて。

御歸朝后も屢々羅漢供養を修したまひしが。頃を寶治

三丁年(三月曆を建長と改む)

大師御年五十正月元日初めて羅漢講

式を行かさせたまひしに。木像畫像の羅漢尊者及び諸

佛菩薩の頂相より放光し。十六の尊者の形を東岩の長

松に化現したまひて感應殊に篤し。參詣の人々信心肝

に銘したりきとぞ。後に傳へて之を羅漢松といふ。昔唐

土天台山の石橋に現れたまひしことある由あるが。

其後未だ曾て聞も及まざる靈感ありとかや。○又

寶慶寺に秘藏する翫月の御述贊も此秋のことありけ

ん(贊文は廣錄卷の十三にあり)

第四十七

(天皇は大師の徳風を聞て紫衣等を賜ふ圖)

建長二庚

年大師御年五十一秋

八月。後嵯峨天皇。大師の聖徳道風を欽仰したまひ。特

に勅使を永平寺に遣はし。鳳詔を齎らし佛法禪師の徽

號(佛法禪師とは蓋佛法正傳の宗祖又初住の地たる深草坊名に取る者なるか)及び紫衣。勅額を賜ひ。且つ

勅願所。出世道場たる繪旨を賜ふ。然るに大師固辭して

受けたまはず。仍て復たひ使臣を遣して強て聖旨を諭

したまひしかば。大師辭するに詞かくして之を受けたま

ふ。然れども之を玉臺錦被に秘して終身被着したま

はず。因みに偈を奉り恩を謝して曰く。永平雖谷淺。勅命

重々々。却被猿鶴笑。紫衣一老翁。天皇之を御覽ありて

増々稱歎ましくしとぞ ○又雲州太守一切經を書
寫して永平寺に納めしも是年のことありとかや

第四十八(靈山院に靈鐘を
開きたまふ圖) 建長三辛亥年(大師御年五十二) 夙年度(まへつどい)

々空中に靈鐘(かまねのね)を聞たまひしが本年正月五日靈山院に
ありて御說法の際亦遙に靈鐘を聞たまふこと二百聲
計り隨喜して聞者花山院宰相入道のみ中將兼賴等男(かたもと)
女數名の者更に聞くこと能はずと云其他聖人の瑞相
として不思議あること多しと雖ども枚擧(まいきよ)に遑(いと)かけれ
ば此に省きぬ

第四十九(八大人覺御
教誨の圖) 大師の元より至聖にましますを以て
生死無常を調御して出現於世したまひしかど應化の

因縁將に尽きかんとし滅度近きにあることを知りた
まふ時正に建長四壬子年(大師御年五十三) 仲夏の頃より
聊(いさ)か病の兆(きざ)しありて初秋に至り教主釋迦牟尼佛入涅槃
の儀式に倣(なま)ひ八大人覺と云へる法門を開示したま
ひ佛祖の惠命を永遠に相續せしめ末世衆生をして離
苦得樂せしむるの法門を親く遺誠し最後の教誨をぞ
かしたまふ拜聽せる緇素(しよそ)の悲歎の言ふ迄もかく草木
に至る迄愁然として洞(ほら)みけり斯くて人皇八十八代
後深草天皇の御宇建長五癸丑年(大師御年五十四) 七月十
四日永平寺を御弟子の孤雲禪師に譲りたまひ且つ自
縫(ほ)の袈裟等を傳へて信を表し給へりき

第五十(永平寺を辭して上京の途次御詠歌の圖)雲州太守及御親戚等京にありて頻りに御上洛を望のぞまるとに付暫く其諫言に隨ませられて八月五日愈いよいよ上京の途みちに着きたまふ發嶠はつたけの頌あり曰「十年喫飯永平場。七箇月來臥病床。討藥人間暫出嶠。如來授手見醫王。」又木の芽山にて御詠あり曰く。草の葉にかどてせる身の木の芽山雲に路あるこゝちこそすれと是より徹通禪師に暇いとがを賜ひて飯山留守せしめらる。○永平在住十有一年山居頌十五首あり。其中に曰く。幾悅山居尤寂寞。因斯常讀法華經。專精樹下何憎愛。月色可看雨可聽。又曰西來祖道我傳東。釣月耕雲慕古風。世俗紅塵飛不到。深山雪夜草庵中。」

第五十一

(上皇醫官に勅して大師を診せしめたまふ圖)

御入洛ありて高辻西洞院の

俗弟子覺念の邸いでに着駕したまふ。上皇之を聞し召し。速かに醫官に勅して日々候診せしめられけり。○或日室内を經行して低聲に法華の文を誦したまふ。次で前柱に書して曰「若於園中若於林中若於樹下若於僧房若白衣舍。若在殿堂若山谷曠野是中。皆應起塔供養。所以者何當知是處。卽是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉於法輪。諸佛於此而般涅槃(法華經卷七神力品の文)。」と此意を我今俗弟子の家うちに於て入滅す。諸佛も是の如くありしが我亦是の如しとの尊意あるべし。○此月十五日の夜。中秋の月を觀たまひて「又見んと思ひし時の秋

たにも今宵の月にねられやとすの御詠ありきとぞ。

第五十二(夜半偈を書し)八月廿八日子の刻(夜の十一時過頃)自ら遺偈を

書して日五十四年照第一天打箇踳跳觸破大千。噴。渾

身無着處活陷黃泉と筆を擲て涅槃の雲にぞ隠れた

まひぬ顔貌の活けるが如く端坐儼然たり。緇白幾多の

弟子殊に波多野出雲守及び覺念等悲歎の涙言辭の及

ふ所に非す。又孤雲禪師と暫し氣絶したまひしと云も

道理かり妻々たる草木も黄葉と變し。喧々たる水聲も

微々として静かなりけん。

第五十三(赤辻にて御火葬の圖)今んとて御遺骸を東山の赤辻に移し

たてまつり。如法に火葬の儀式を行ひ野邊の煙の殘し

つる舍利羅を收めて九月六日に京を發し同十日に永

平寺に奉安したてまつりけり。

第五十四(御遠忌執行的圖)同十二日永平寺の方丈に於て茶毘の式

あり。法要勤行孝順の禮悉く在ますが如く如法に供養

したてまつりけり。

第五十五(承陽庵の圖)永平寺西北隅に舍利羅を納めて塔を建

て。廟名を承陽庵と稱し奉つる。孤雲禪師傍に草庵を結

び。且暮の供養に給士したまひて慈恩の洪徳にそ報い

たてまつりけり。

第五章 遺徳

嗚呼佛教各宗に於て最も全國に隆盛を極むる宗門に即

○承陽大師

ち承陽祖師の法流あり。亦以て大師の洪範恩徳の法乳に
 あらざらんや。此に於てか。孝明天皇と嘉永五年八月に
 勅して佛性傳燈國師の諡號を賜ひ又。今上皇帝陛下に
 明治十二年五月更に勅して承陽大師の號を加賜せられ
 たるぞ尊かりける。而して吾人の如何に此徳を受用し。如
 何に此恩に報謝せん。欽み惟ふ非思量の端的に於て日々
 の生命を等閑にせず私しに費さざらんと行持せんのみ。

承陽大師御行狀圖解説畢

圓明國師御行狀圖解説

恭しく。我大日本曹洞正宗の太祖と仰き奉る能登國鳳至
 郡櫛比庄總持寺開山佛慈禪師弘徳圓明國師瑩山紹瑾大
 和尚の御履歷を原ね奉るに。越前國多禰邑の豪族藤原氏
 の一子にましくて

第一(國師の父母深く無常を觀したまふ圖)或時國師の嚴父慈母書院にありて四
 方の風景を眺めたまひしが忽ち薺花の日光に萎るゝ
 を見て深く無常を感せられけり。

第二(御母公祖先の御墓に詣り子なきを歎せらる圖)其頃御母公の御年三十を超えさせ
 たまへとも未た一子もかきを歎き時々に祖先の御墓
 に詣して嗣子あきを歎かせられ。神に佛に祈誓を籠め

たまへども更に其驗たまあかりしが。

第三(御母香花院に聞法の圖)或時香華院に詣して禮佛聞法の際殺生の罪と諸の罪の中にも別わかて罪深く放生の善根を總まての善根の中にも別わかて功德多し世に子こを持もぬ者あるも多おほくハ前世に殺生したる報ありと聞き深く悟り玉ひ。

第四(御母聞法感悟の意を御父に談話の圖)疾く我家に皈り聞法感悟の旨を嚴父に委く談話せられければ嚴父大に感歎ましくしとぞ

第五(御父母因果の理を感して放生を勵みたまふ圖)夫より命を失ふべき鳥類魚類等の生物を多く集めて頻りに放生の善根を行ひつゝ。

第六(御母多彌の觀音大士を拜して一子を得んとを祈りたまふ圖)一心不乱に一子を授けさせ玉へと多彌の觀音菩薩に祈誓したまひし甲斐ありて。

第七(御母日輪を吞むと夢を見て妊娠せらるる圖)或夜日輪を吞むと夢みて遂に懷妊くわいにんしたまひしかば愈よ信心肝かんに銘なづ毎日觀音菩薩を禮拜すること三百三十三拜又觀音普門品を誦むこと三十三遍つゝ一日も怠りたまひさりしかば。

第八(國師御誕生をまします圖)遂に人皇八十九代龜山院天皇の御宇文永成五年十月十八日國師御誕生ましますせり。

第九(襦袢の中に稱名したまふ圖)國師ハ其初より尋常の小兒と事かひり文永七年庚年國師御年三歲襦袢じゆばんの中にありて合掌し南無なむと唱ひつゝ佛を禮する姿をかしたまふ。

第十(奇異の重病に罹りたまふ圖)御年五歳の頃奇異の病に罹りたまひしが早つねや此頃ハ母と共に普門品をぞ誦よたまひしとぞ其功

德に依てか病遂に治平しける。

第十一(石を積みて禮拜したまふ圖)國師平素の遊戯あそびたはむれに石を積て佛像及び寶塔に擬して合掌禮拜あいまひしたまひけり。

第十二(多爾たにの觀音大士を禮拜の圖)斯て文永十酉癸酉年(國師御年六歲)の春或時慈母に隨て多爾の觀音大士に詣してつくぐと尊像を仰き見たまひ。此菩薩ハ何程の功德ありて斯く諸人の恭敬供養を受けたまふや。且つ菩薩も亦た人ある歟との疑を起したまひしより忽ち出家求法の志念こころざしを萌もしたまひしこそいと畏おそこけれ。

第十三(經史を讀みたまふ圖)文永十一甲戌年(國師御年七歲)師の教を待たずして經史きんしの大意たいぎに通曉つうきやうしたまふ。

第十四(永平寺に登りたまふ圖)頓たがて八歲建治元乙亥年の春に到りて父母に請こひ四月八日嚴父に隨ひ永平寺へ登りたまふ。

第十五(御剃髪の圖)即日徹通義介禪師に投して沙彌さみとかりたまふ。

第十六(菩薩戒を受けたまふ圖)弘安三庚辰年二月十三日(國師御年十三歲)孤雲懷奘禪師に就て菩薩の大戒を受けたまふ。斯くて前後十年が程を徹通禪師の御教を受け學問の窓まどに螢たなごを集め。坐禪の床ゆかに股ももを刺さし。夜を日に繼つぎて勉勵べんれい大方ほろみからざりけり。

第十七(諸方へ行脚に出たまふ圖)斯て弘安八乙酉年(國師御年十八)の正月徹通禪師に暇を乞ひ。初て行脚に出たまひしが

第十八(寂圓禪師に參見の圖)先づ大宋より來られて大善知識の聞へ
 高き越前大野の寶慶寺寂圓和尚に參トたまひ。其より
 京都萬壽寺の寶覺禪師白雲の慧曉和尚等に見ゆたま
 ひ。求法の心愈々深し

第十九(法門御研究の圖)尋て叡山に登りて天台の法門を學ひたま
 ひ。大藏經をも閱覽したまひけり。

第二十(法燈國師に參禪の圖)明れば弘安九丙戌年國師御年十九の七月
 に叡山を下り紀州由良の興國寺法燈國師を訪ひまゐ
 らせて禪門の奧義を扣き。翌年も亦諸方を遊歴して有
 ゆる智識を尋ねたまふに。到る處感賞を蒙りて悟道の
 許可を受けたまへとも未だ自ら安んずたまはず。

第廿一(水乎寺に御販省の圖)遂に正應元子戌年國師御年二十一の春永
 平寺に販りたまひて徹通禪師に隨ひまゐらせ翌年禪
 師と共に富樫左衛門尉藤原家尙の請に應トて加賀の
 大乘寺に赴きたまひしが。是年たま〜法華經を讀せ
 たまひて。父母所生眼。悉見三千界。と云る文に至り大に
 悟りたまふ所ありしかば。直に禪師に其由を申させたまひ。是より更に工夫を凝し。永仁二甲午年國師御年廿七
 に至るまで常に大乘寺に在して禪師の教を受たまひ
 又此間に一切經をも讀了らせたまひけり。
 第廿二(入室傳法したまふ圖)斯て是年十月二十日の事ありしが徹通
 禪師上堂の法式を行はせたまひ。平常心是道と云るこ

とを説たまふを聞き豁然として無上道を悟りたまひしかば。翌年永仁三未年(國師御年廿八)正月十四日に入室せしめ承陽大師より孤雲禪師。孤雲禪師より徹通禪師へ三代相承したまへる袈裟。此袈裟ハ承陽大師。自ら縫ひたまひし者ありを授かり。日本曹洞第四祖の位をぞ繼つぎせたまひける。

第廿三(郡司城滿寺御建立の圖)此頃細川刑部太輔賴春の屬將そくしやうにて加賀の富樫家の縁族えんぞくある。阿波國海部の郡司某なにかしと云ふ人ありしが。夙はやくく國師の道德に皈依しまゐらせ永仁四丙年(國師御年廿九)に其海部の地に城滿寺と云ふ寺を建て頻に請し申し、かば遂に彼國に赴きたまひて。郡司を

始め遠近の道俗を教化したまひ。

第廿四(大慈寺に於て二僧參問の圖)其翌年と肥後國川尻ある大慈寺の寒巖禪師を訪らひたまひしかば。禪師の喜悅一方あらざりき。而て此に斯道。鐵山と云ふ二僧ありけるが。國師に參問して大に利益を蒙りきとぞ。

第廿五(始めて授戒會を行ひたまふ圖)永仁六戌年(國師御年三十一)に城滿寺にて。始て授戒會を行はせられ。御化益大方あらざりしが。

第廿六(介祖よりの招請狀を受けたまふ圖)正安元亥巳年(國師御年三十二)大乘寺徹通義介禪師より御使ごつかいの僧來り加賀へ皈らせたまふべし旨。傳られければ。直に城滿寺を去て大乘寺に到り。

第廿七(大乘寺にて介祖に代り御説法の圖) 兩三年が程の徹通禪師を補佐し奉り時々禪師に代りて説法したまひしける

第廿八(傳光録開示の圖) 傳光録を著して佛祖正傳の因縁を説示したまひしも此頃の事なりきとぞ。

第廿九(家尚公國師に參問の圖) 又正安三辛丑年(國師御年三十四)二月のこ

とありしが富樫家尚大乘寺に詣し國師に參問得益ありて欽仰の程愈々深かりきとぞ

第三十(信直公國師に就て受戒の圖) 同年夏滋野信直其夫人と共に大乘寺に詣して國師に受戒を請願せられしかば國師懇ろに授戒せられける然して徹通禪師を追々に老衰したまひ最早や大乘寺の任務にも堪させたまひぬは乾元元

壬寅年(國師御年三十五)に大乘寺を國師に譲りたまひしかば出家在家の隔てなく御弟子とありて御教を受くる者ますく多く總持寺の二代にあらせたまへる峨山紹碩禪師も大乘寺の席を繼せたまへる明峰素哲禪師あど云へる豪傑の宗將も皆此頃に他宗より來りて宗旨を改め法を嗣たまひし方々ありとぞ是より五六年が程の常に大乘寺に在して外に懇切に道俗の弟子を導き内に九十歳を超ゆたまへる徹通禪師に孝養を尽し又其暇に坐禪用心記三根坐禪説信心銘拈提かど云る宗門肝要の書を著したまひしが徹通禪師の延慶二西巳年(國師御年四十二)の九月十四日に九十一歳

にて遷化したまひしかば。御葬儀其他の御追孝も大方
からさりけり

第卅一（御恩忌上堂の
際天花降る圖）翌年九月の一周忌御法會に對眞上堂

したまひしときにも。天上をも感動せしめたまひしに
や。天華ふりて本堂の邊りに散乱し。參詣の道俗掌に擲
る程の有様ありしかば。況て人間の感歎の限りもあら
ざる事どもありけり。此に加賀國淨住寺の可鐵鏡と云
る僧あり。此人の先年阿波の城滿寺にて菩薩大戒を國
師に受けしより歸依敬慕の念益々深く。遂に應長元辛亥
年（國師御年四十四）の秋に淨住寺を國師に寄附し改め
て開山第一世とあし奉りしかば。十月十日淨住寺に移

りたまひしが。明れば正和元壬子年（國師御年四十五）の春
能登國の大名にて滋野信直と云る人深く國師に歸依
しまゐらせ。同國酒井の土地若干を國師に寄附し奉り
しに其土地山水に富みて世の塵に遠ざかり最も國師
の御意に適かなはせられ直に庵いほを結ひてぞ住すませたまひ
ける。

第卅二（永光寺建立の祭具僧
土木を指揮する圖）然るに又大乘寺の開基ある。富樫左

衛門尉藤原家尙ちやくなんの嫡男ちやくなんにて藤原家方かたと云る人。彼の酒
井の庵を改て伽藍建立に及ひしかば。翌癸丑年頓て落成
し。國師開堂したまひて洞谷山永光寺と名けたまひけ
り。然れの四方の學徒又此に集り壺庵いほ至簡かん禪師珍山源

照禪師おど云るも皆此時に宗旨を改め國師の弟子と
 かりたまひしかり。偕さき又明あきて正和三寅甲寅年國師御年四十
 七に能登國はくわ羽ひ嘖ひの郡司得田某氏と云るか光孝寺を
 建て開山に請し奉りければ。是より五七年が程ハ加賀
 の大乘寺。淨住寺。能登の永光寺。光孝寺の四箇所を巡り
 ての御化導かれども永光寺にをいす日の多かりけれ
 ば。朝野の道俗大方ハ永光寺に集まりて教化を仰き奉
 り。滋野信直の妻の出家して祖忍尼と名けられ婦人か
 がらも悟りを開きて遂に洞宗くわうしゆ聯燈れんとうの一人に加かはりし
 も峨山禪師が國師の御像を寫し題贊たいさんを請こたてまつら
 れしも此頃の事かりけん

第卅三

(永光寺に於て應供會に奇瑞ある圖)

羅漢供養に十六尊者光明を放ちて
 應現したまひ承陽大師が寶治三年に永平寺にて供養
 したまひし時の如くかりけるも。又洞谷山の蓮華峰に
 圓通院を建立して國師御母の持念したまへる觀音尊
 像を安置したまひしも。皆亦た此頃の事かりけり。

第卅四

(定賢律師觀音大士の靈告を感ずる圖)

然るに能登國鳳ほう至し郡ぐん櫛し比ひ庄じやうに諸嶽
 寺と名る眞言の律院あり行基菩薩の開基として觀音菩
 薩の本尊かり諸人の信仰あさからざる事かりしが。元
 享元辛酉年國師御年五十四の四月十八日に諸嶽寺の主
 かる定賢律師觀音大士の御告にて不思議の靈夢を感
 せし事ありとて。

第卅五(觀音大士の靈告に因て國師を總持寺へ向はらるる圖)其寺を國師に譲り奉らんと律師永光寺に詣ずる途中國師に逢ひ奉りて直に諸嶽寺に迎請しければ是年六月八日と云ふに眞言律院を改めて曹洞宗の道場とあしたまひ開堂の法式を行ひ諸嶽山總持寺とぞ名けたまひける。

第卅六(上皇勅して疑問を奏答せしめ玉ふ圖)斯く道德の聞ゆ四方に高かりければ遂に天聽にも達しけるにや。後醍醐天皇の勅詔にて孤峰覺明和尚を勅使に立られ十箇條の御疑難を國師に問はせたまひければ國師の一々之に答辭を附けたまひ。頓て奏上したまひしにその御答の妙朗あること本朝に佛法渡りてより以來未だ嘗て有らざるの法門

ありとて殊の外叡慮に協はせられ御感斜なまめからずして再び勅使を能登へ降して紫衣を賜ひ且つ勅額を賜ひりて總持寺を官寺の列に加へたまひけり。

第卅七(放光菩薩御靈感あらせらるる圖)然るに其翌年元亨二壬戌年國師御年五十五皇后御懷妊につき總持寺の放光菩薩に勅願の旨ありければ菩薩の靈驗著るしかりしとぞ。

第卅八(總持寺の繪旨をたふす圖)八月二十八日に繪旨を賜ひり補任曹洞出世之道場宜相並南禪第一之上刹著紫衣法服奉祈寶祈延長との叡旨ありしかば是より更に曹洞宗の規模も立ち曹洞の門風いよく熾さかんあるに及びけり。斯て元亨三癸亥年國師御年五十六の二月加賀の淨住寺を

は無涯禪師に譲り。能登の光孝寺の壺庵至簡禪師に與へ。たまひて

第卅九(總持寺十條の龜鑑を定め玉ふ圖) 正中元甲子年(國師御年五十七)三月十

六日總持寺十條の龜鑑を書して永く法孫の遵式とか

したまひ。八月七日に總持寺をも峨山紹碩禪師に席を

繼がしめて退院上堂の式を行ひ。大乘寺の明峰素哲禪

師を伴ひて酒井の永光寺へ赴きたまひしかり

第四十(永光寺に於て微恙を示したまふ圖) 明て正中二乙丑年(國師御年五十八)の

春より聊か病の兆あり。七月俄に處々の御弟子達を集

めたまひ。八月八日に永光寺を明峰禪師に譲りたまひ

て。承陽大師御臨終の儀式の如く八大人覺を説せられ。

十四日に御本師ある徹通禪師を御供養あり。十五日の羅漢講式をも常の如く勤めたまひ。御氣色の程少しも變らせたまひざりしが。

第四十一(偈を書して掩然坐化したまふ圖) 夜半俄に鐘を鳴らし大衆を方丈へ

集めたまひ。暫しか程御說法ありて。頓て自耕自種閑田

地。幾度賣來買去新。無限靈苗繁茂處。法堂上見挿

鎌人と云る偈を書きたまひ。扱てのたまひけるを。我

化縁已に盡き涅槃時至れり。釋迦牟尼世尊の二月十五

日の夜半に入滅したまひ。我の八月十五日の夜半に衆

を辭す。同中に異あり異中に同ありかどのたまひつゝ

坐禪の床に坐したまひしまゝ。恬然として息絶たまひ

しかば。大衆の悲歎かぎりなく中にも明峰素哲禪師の
暫しが間た氣絶して人事を辨へたまひざりしとぞ

第四十二（庭前にて茶
毘し奉る圖） 偕あるべきに非ざれば。法の如くに入

般涅槃の儀式を行ひしに。遠近の道俗集ひ來て葬儀に
列ある者數萬人。二十一日に火葬したてまつりしに。

第四十三（國師の舍利を總持
寺へ護送し奉る圖） 多くの舍利を得たりしかば。大乘

寺。永光寺。淨住寺。總持寺の四ヶ所に分ち葬りて。各々塔
廟をぞ建立したてまつりける。

第四十四（總持寺に於て
法要勤行の圖） 斯て同月廿三日總持寺に於ては恭し

く舍利塔を莊嚴し。慇懃いんげんに供養し奉れり

第四十五（總持寺祖師
塔廟の圖） 然して佛殿の後岳に舍利羅ををさめ

て塔し。之を無縫塔と名け奉りけり。

○遺法の嗣子五人あり。曰く。素哲。智洪。紹碩。至簡。源照。とい
ふ。遺著の傳光錄。坐禪用心記。三根坐禪說。清規。信心銘拈提。
等あり。國師滅後三十年を過て。後村上天皇深く國師の

道德を追崇したまひ。正中九年甲午の三月二日に勅して。

佛慈禪師と謚號を賜ひ。更に又四百余年を経て。安永元年

壬辰十一月廿九日に。後桃園天皇の宸翰しんかんにて弘徳圓明

國師の號を追謚したまふ。吾宗の門風を國師より愈々大

盛とかりて今日猶ほ全國一萬有餘の寺院を看るに至る

眞に是れ洞宗空前絶後の中興太祖と仰ぎ奉る者ありき
圓明禪師御行狀圖解畢

明治廿九年十一月一日印刷
全 年十一月十日發行

編輯者 鷺尾透天

石見國那賀郡長濱村

印刷者 村田三男三

京都市御幸町二條上ル

印刷所 平安印刷商會

京都市御幸町二條上ル

發行所 進教會

石見國那賀郡長濱港

賣捌所 貝葉書院

京都市木屋町二條

進教會出版書籍類の部 目錄

越大本山特許 ●圖數五十五段、大畫仙紙全面摺

曹洞 高祖 承陽大師御行狀圖 全壹枚

縱五尺二寸
横二尺六寸
定價貳拾五錢
郵稅貳錢

能大本山特許 ●圖數四十五段、大畫仙紙全面摺

曹洞 太祖 圓明國師御行狀圖 全壹枚

縱五尺二寸
横二尺六寸
定價貳拾五錢
郵稅貳錢

兩大本山貫主大禪師題字、大内青巒居士校閱、鷺岳道人編

承陽大師 圓明國師 御行狀圖解説 全壹冊

正價拾貳錢
郵稅貳錢

全國洞門の寺院其數一萬有餘あり隨て檀信徒も幾十萬の多きに達す然其布教上に至ては

甚た不注意と云ざるを恐す今や文運隆盛事理競争の時責まり改正定約實行の日近にあり
豈に無頓着にして此貴重の時間を閑過すべき者ならんや況や當路者は發願利生の任大山
よりも重きことを知得して徒弟檀信徒の教育に細にも大にも致々として日月に先んずるの
手段なくんばあるべからず鷲岳氏は此に於て淋漓憤心せらく先づ宗徒たる者は宗祖の妙
徳に皈依せしむるを第一着とし而て安心門に入らしめずんば何ぞ能く宗徒たるを得ん
遂に前顯兩祖の圖繪と傳記とを編述せらるゝに至る又た古來一祖雙幅の圖世に行はるゝ
あるも之を保持するの寺院十箇寺に一ヶ寺の割合と云も猶ほおぼつかなし又其稀にある
圖中に漢文の傳記一端を加ふるのみにて説明の辭を取らざる者亦稀なり今氏は其祖圖の數
幅に亘るの不便を思ひ且つ説明の甚だ不完全なるを憂ひて此に最好便宜を計り一祖一幅
の圖繪を編し建斯圖中(高祖の分)在俗の感化に餘り必用なき圖筆を去りて圖を大にし事
を明了にして遠見の便に供し圖の下段一例に法名と施主名とを記入すべきの野を加へ一
段圖一名宛の施主を取るの便に供せり(又以て廣く因縁を結ばしめんことを要するにあり)
尤も一一の施主を要せざる向は野を除却して表具するを得る兩祖圖解説は高祖の生涯
を三期に分別して精細に傳記を述べ殊に宗祖の妙徳感化は一讀して祖意を伺ひ得らるゝ
なり今や圖解説と云は信徒に圖を説明するの最も要書なるを以て名けたり是全く古來の
圖中に漢文圖解の一端を記入するの無効なるを感慨するの因み此の明細正實なる傳記を
別に顯さるゝに至れるなり(其圖外に亘る一代中の事實は)斯く便利に注意して何卒して洞宗の
宗徒に悉く祖徳の感化を蒙らしめんとの熱心より成りたる者なり且洞宗の寺院には必ず
宗祖の圖繪一幅宛は布教の爲め安置せざるべからざるは今更申迄もなきとなれば幸に此
圖繪と(圖解と)を求めて彩色衣裝の施主を取らば何の苦もなく奉懸するを得らるゝな
り又一幅圖のとなれば在家にも求めて奉懸拜徳せしむるを得るなり
●欽み申す全國洞宗の寺院中宗祖の圖繪所持なき向は希くは宗の爲め檀信の爲め一圖と
一本とは必ずしも御求めありて親く御教化あらんとを祈る
謹言

兩大本山貫主大禪師題字 大内青齋居士校閱並序 故古城瑠舟和尚著

曹洞教會安心問答 全壹冊

紙數 百十四頁
正價金 拾五錢
郵稅金 貳錢

此書故瑠舟和尚が曾て處々に說教演説を爲して吾宗の安心を説きし折りから四原則の
質問を爲せる者あり或は他宗徒より詰難を爲せる者ありしなぞ一一記憶し且つ修證義の
意猶ほ高尚にして中々に了解せざる者の多きを悲み其詰問及四原則の趣意等細密に埋を
盡し一一問題を設けて婆心の餘り至極簡易なる説明を試みられたる書なり初め曹洞教會
の趣意より畢り總結に至迄七章三十九問答あり實に洞宗の檀信徒に施本し又は購水せし
め之を通讀研究し解了せしめて安心を證得せしむるに尤も利益あり向は大内居士の校訂
をも請ひたれば其意完徹したる良書なり又た青年教會等をも開きて可成此書意を飲込
しめ研究せしめば庶幾は同人覺位の得果易かるべし乞ふ天下洞門の宗匠と檀信徒をして
之を求めしめ玉む且つ施本をも爲し玉ひて財法二施功德圓滿菩薩の行を爲し玉はんことを

洞上 日日行持 全壹冊

正價金 參錢五厘
郵稅 三冊迄貳錢

右は洞上在家の老若男女諸士が毎日朝から晩迄晩から朝迄勤め心得べき行持を集めたる
者なり洞宗檀信徒には必ず勤め求しめて勤め心得せしめざるべからざるの良書なり其中

を三章に分ち●第一章禮誦式●第二章聖賢の垂示安心摘要●第三章佛祖緣日其他の心得
○○成るべく少年教會を開きて將來有爲の少年に實際教授を爲すを好機とす
右施本用として五十冊以上御求めあれば特別減價として一冊參錢二厘の割合百冊以上は
一冊參錢宛の割合にて送本可致候

藹々居士著

洞上安心唱歌

定價金貳錢施本用として二十冊以上五十冊迄壹錢五厘●五十冊以上百冊迄壹錢參厘●百冊以上は幾百冊にても壹錢宛の割合郵税十二冊に付貳錢也

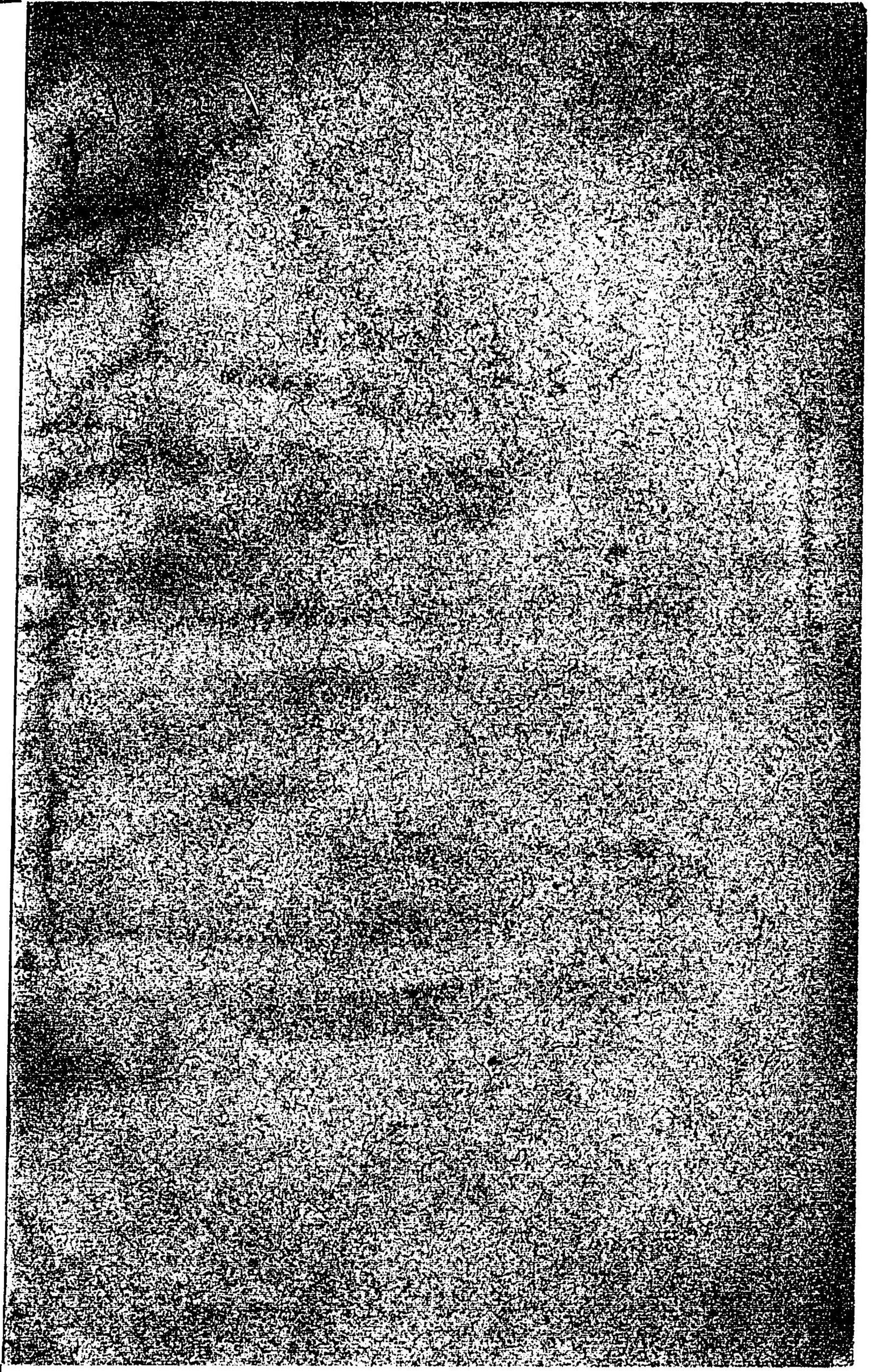
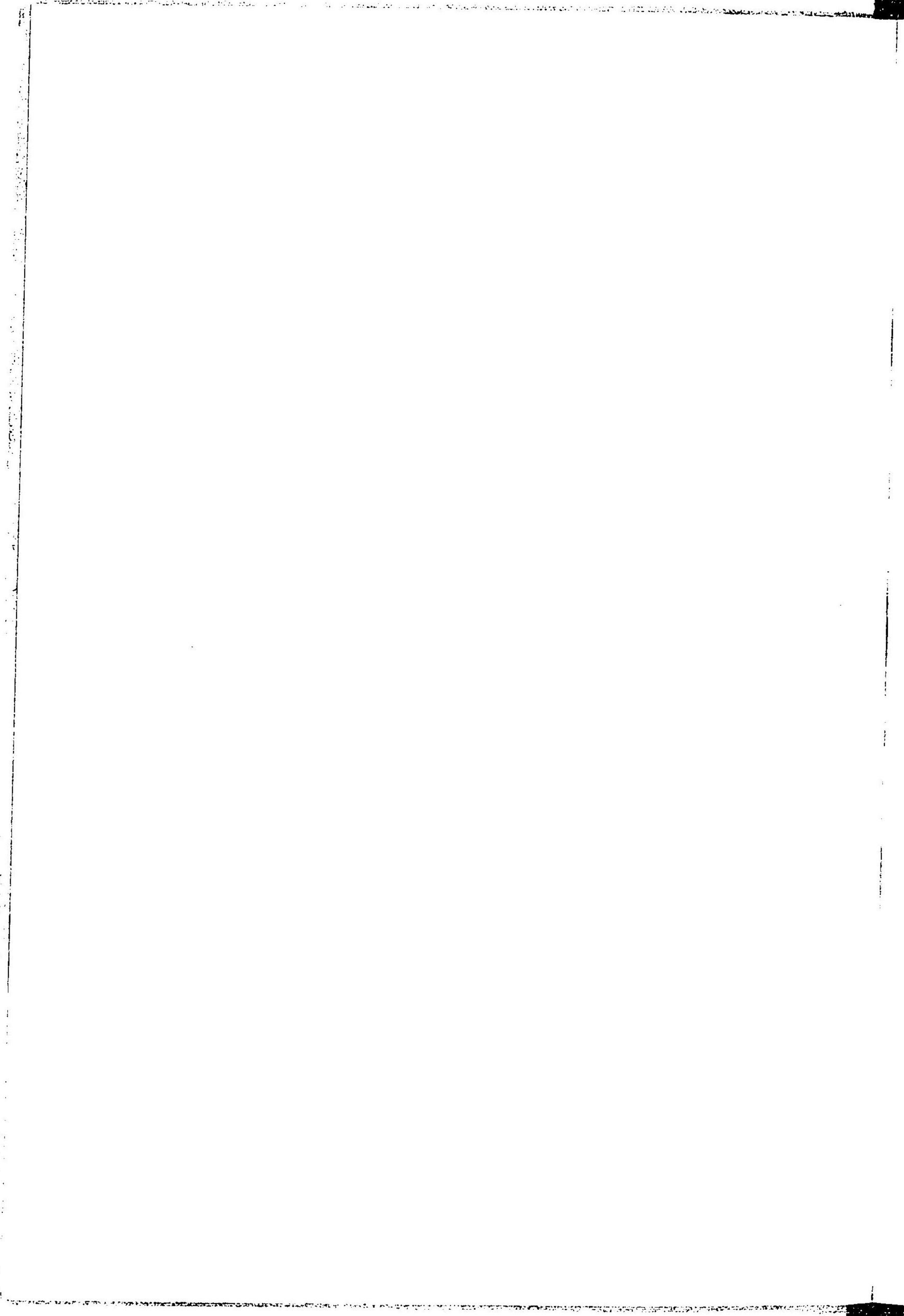
此書は曹洞宗の安心たる四大原則の趣意を一一唱歌本に編せられたる者なり至極簡易にして能く安心の意を説きし者なり曹洞宗の信徒は求め讀みて甚だ有益なるの書なり婦女少年に至る迄能く安心了解するを得せしむるや疑ひなし土産物施本等に最も便利なり

●御申込名宛は **島根縣那賀郡長濱港進教會** と明記して御送狀被下度候

●爲替金の取組は都て濱田町郵便電信局のと●郵券代用は必ず一割増のと

石見國那賀郡長濱港

發行所 進教會



Vertical text on a white label, possibly a page number or reference code.

特18

995

承陽大師

円明国師 御行状図解説

国立国会図書館

019536-000-3

特18-995

承陽大師円明国師御行状図解説

鷲尾 透天/編

M29. 11

ABG-0302

